

二年学年だより

No. 11

2月号

令和6年2月1日発行

209HR

思い出話

共通テストまで一年を切りました。受験シーズンになると、毎年自分の受験を思い出します。忘れもしない高校の合格発表。どこかでたかをくくりながら見上げた合格発表番号の中に自分の番号はありませんでした。その時の絶望感を一生忘れることはないでしょう。家に帰って泣きました。仕方なく別の高校に進学しましたが、その高校の制服を着るのが嫌でたまらず、落ちた高校の前は三年間一度も通りませんでした。そんな私にとって、高校は楽しい場所ではありませんでした。

でも、私は働く場所に高校を選びました。自分でも不思議だなあと思います。今になって思うのは、「高校が人は変わることが分かった場所だから」かもしれません。高校受験の後、受験用の勉強道具を整理しました。パラパラとめくった問題集は空欄もあり、とても使い込んでいるとは言えない状態でした。自分ではそれなりに勉強していたつもり、授業も聞いていたつもりだったけれど、それは本当に「つもり」だけだったことに気が付き、「勉強は自分のためのものなのに、そんなものにすら真剣になれなかったのか」と自分のことを本当に情けなく感じました。「大学受験は、せめて自分に悔いが残らないようにしましょう」そう決めてからは、授業の予習、復習、課題、小テストなどに真剣に取り組みました。それまで何事も波風立てず、受け身で生きてきた私にとっては、「初めて自分の意志で動いた」経験でした。幸い学校の先生たちを含め、たくさんの人の助けがあつて大学は第一志望に合格できました。合格できたことももちろんですが、自分で決めたことに真剣に取り組んだ高校時代の経験が今も私を支えてくれています。人生は「自分で選択して、努力する」この繰り返しです。高校時代の経験がなかったら、まったく別の人生を送っていたと思います。

「私と同じように考えた方がいいよ」などとは思いませんが、私の思い出話が今の自分を振り返るきっかけになるならうれしいです。

(209HR担任)

思い出話その2

1月13日、14日に共通テストが行われ、本校からも多くの生徒が受験しました。さかのぼって、平成2年1月13日、14日、私は共通テストの前身である第1回大学入試センター試験を受験しました。時代は昭和から平成へ、大学入試は「共通一次試験」から「センター試験」へと姿を変えるタイミングでの大学入試です。私は、自分がやりたいことがあって、当時通っていた松山の高校を一年間、休学して、一年年下の学年と卒業しました。入学が一緒の同級生は「共通一次試験」、卒業が一緒の同級生と私は「センター試験」。センター試験第1回は、教科により難易度が様々で大きな得点調整もありましたが、唯一点が取れそうな得意教科は易しめの出題で私としては残念でした。そのうえ、「すべり止め」に受けた大学は、担任の先生に「合格者名簿にあなたの名前はありませんよ。」と告げられ、慌てました。私の大学入試は、ほろ苦い思い出となりました。4月生まれの私は、20歳を目前に控えており、さすがに高校に4年通ったので浪人はできないなどと考えて、何とか合格することができた大学に進学しました。そして、希望していた教科の教員免許を取得し、大学卒業後は、教員の道を歩むことができました。

今は、人生100年時代と言われます。長い人生を送る生徒の皆さん、上級学校は「何を学ぶか」という選択がとても大切です。私は資格が必要な職業に就いたので、その資格がとれなければ意味をなさず、何とかその入り口にたどりつけたことはラッキーでした。一度就職すると、専門分野の違うことを学び直すのは、不可能ではありませんが時間がかかります。皆さんなら、今からどうとでもなります！どうか、自分の好きなこと、目指したい分野を大切にして進路実現に向かって、歩んでください。応援しています。

(209HR副担任)